郷愁

佐左木俊郎

私はよく、ホームシックに襲われる少年であった。八百屋の店頭に、水色のキャベツが積まれ、赤いトマトオが並べられ、雪のように白い夏大根が飾られる頃になると、私のホームシックは尚一入烈しくなるばかりであった。

そんなとき、私は憂鬱な心を抱いて、街上の撒水が淡い灯を映した宵の街々を、微かな風鈴の音をききながら、よくふらふらと逍遥あるいたものであった。

店の上に吊された、五十燭ぐらいの電燈が、蒼白い、そしてみずみずしい光をふりまき、その光に濡れそぼっている果物屋の店や、八百屋の店は、ますます私

の心を、憂鬱に、感傷的にしてしまうばかりであった。併し私は、馬鹿馬鹿しいほど淋しく、物哀れな気分になりながらも、こうして八百屋の店や果物屋の店頭を覗いて歩くのが好きだった。

そうして逍遥うた揚句には、屹度上野の停車場へやって行ったものであった。

停車場の待合室にはどこの停車場にも掛かっているような、全国の、国有鉄道の地図が掲げられていた。

その地図の下に立ってみすぼらしい身装の青年が、その地図の上の距離を計ったり、凝っと凝視ていたりして、淋しい表情で帰って行くのを、私は幾度見かけ

たか知れなかった。

私はそういう人々を、殆んど毎晩のように見かけた。なかには、眼を潤ませて帰る青年もあったし、ちかちかと睫毛を光らせて戻る少年もあった。

併し私は、そういう人々を、ただ単に、見たとばかり言い得ないような気がする。

その人々の姿こそ、当時の私の姿ではなかったろうか？　歩いてでも郷里にかえりたかった。当時の私の心ではなかったろうか？

或る夜のことであった。私は停車場で、偶然一人の

友人と落ち合った。彼は非常に沈んでいたようであった。

「誰か送って来たの？　それとも誰か来るの？」と私は訊いた。

「ううん。」

彼は神経質な眼をして頭を振った。

「君は？」と彼は訊いた。

「僕も、ただ散歩に。——ここへ来ると、田舎の言葉が聞けるもんだから……」

「僕もそうなんだよ。ただそれだけで、僕は小石川からわざわざ出掛けて来るんだよ。」

彼はこう言って、深い深い溜め息を一つついた。

私と彼とは、黙々として目を伏せて公園前の方へ歩いて行った。そうして歩きながら、彼は低声（バス）に、哀れっぽい調子をつけて歌ったのであった。

停車場（ていしゃば）の、地図に指あて故里（ふるさと）と
都の距離をはかり見るかな。

私も彼も、大望を抱いて東京へ出て来たのであった。故里を去る時には、その意志を貫かないうちは、石に噛りついても帰らないはずであった。

併し、私も彼も、もう……。

その月の末に、私は彼が郷里に帰ったということを聞いた。もう再び東京には出て来ないつもりだということをも聞いた。

併し、彼の意志の弱かったことを誰が嘲（わら）い得よう？故郷を持っている人々、そして都会の無産者の生活を知っている人々は、誰も嘲うことは出来ないはずだ。

私はその後も、折々停車場へ出掛けて行った。その帰り途、私はきっと、あの時彼が歌ったあの歌を、低声（バス）で歌って見たものであった。

停車場の、地図に指あて故里と
都の距離をはかり見るかな。

この歌を私は幾度も繰り返した。繰り返しているうちに、私の歌はいつか、泣き声になっていた。そして、睫毛(まつげ)に涙のちかと光っているのを意識したものであった。

今では、もう停車場へ出掛けるようなことはなくなった。

けれども、夏が来て、八百屋の店頭に赤いトマトオが積みあげられ、水色のキャベツが並べられ、白い夏大根が飾られる頃になると、私は今でも、彼のあの歌を思い出すのである。

——大正十五年（一九二六年）『若草』十二月号——

底本：「佐左木俊郎選集」英宝社
１９８４（昭和59）年４月14日初版発行
初出：「若草」
１９２６（大正15）年12月号
入力：大野晋
校正：鈴木伸吾
１９９９年９月24日公開
２００３年10月21日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。